

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷二十五第

月六年六十和昭

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戦時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

立志傳中の學者

牧野 虎次

永井柳太郎氏と語る。

昨秋予は東京で永井氏を訪ね、久振りで京都の母校御來訪の約束をした時、氏は京都で是非面會したい舊友の名を列舉せられたが、その隨一に博士の名を挙げられた。それは博士の植民政策學者として多年の造詣の深きに敬意を表されてのことであつた。曰く博士は京都に於て、予は東京に於て多年同一講座を擔當して來たのであるから、何時からか一度懇談の機會を得度と望んで居た。若しこの際その宿望を充すを得ば幸甚であると。不幸にして元拓相のこの宿望は遂に果たされず、今この痛恨事を見るに至つた。定めし元拓相は今回博士の長逝を聞いて悵然たらるゝことであらう。博士が植民政策學の權威者たることは、元拓相たりし永井氏のこの談片に依りても、その一斑を察することが能るのでないか。

少年時代の憶ひ出で。

博士と予とは數年の差を以て、戸籍の上から云へば予の方が兄と云ふことになつてある。予は博士の少年時代に、賢母の苦心の許で非常なる奮闘をせられつゝ在つたことを目撃して居る。博士の苦學はさること乍ら、母君が數名の子女の教育の爲に、萬事を抛つて精進せられて居た姿は、涙なしには語られないのである。母君のこの努力なしには、博士とその姉妹の今日も稱すべきである。博士の生涯は學的奮闘の立志美談であると共に、其の蔭には母君が目に見えぬ處で、夜を日についで賢母美談を綴られて在られたことを忘れてはならぬ。之れと共に母君を後援せられた故ゴルドン博士と同夫人及び博士に同情せられた故デビス博士の厚意を讀へずには居られぬ。博士が學業の傍らデビス博士著新島襄先生傳を翻譯せられたことは、同人等の悉知する處であるが、當時まだ若かりし博士に此舉ありしは、デ博士の一と通りならぬ用意の存せしを

想ふに足る。

信念一貫五十年間。

博士が好學の精神止み難く、笈を負ふて入洛、我同志社に學ばれたるは、明治二十五年秋で、博士は當時十九歳であつた。同志社に入校せらるゝや否や、直に基督教を信じて受洗、信者となられた。これは母君の感化の然らしむる處であるが、同時に博士の着眼の非凡なるを察するに足る。天稟の性格が博士を驅りて、この果斷なる信仰生活を取らしめたと同時に、眞面目なる信念が博士の性格をして一層几帳面ならしむるに至つたことを認めずには居られぬ。世人が視て以て潔癖とも評する程に、清廉にして峻嚴であり、所信に對しては何人も又何事をも假借せなかつた態度は、洵に敬服に堪へぬ處である。何となれば博士のその態度は嘗に他に對してのみならず、自ら持することも又た自ら律することも、正にその通りであつたからである。少年以來終始一貫せる博士の立志美談は、實にこの信仰の源泉より逆り出たのである。

時代の先驅者。

博士をして夙に植民政策に着眼せしめたものは如何なる動機であつたかは、予の聞き及ばなかつた處である。しかし博士が若くして基督教を信じ、宣教師等と接觸し新島襄先生の傳記に親しまれたことが、博士をして海外雄飛に着眼する機縁となつたことは、察するに餘りある。博士は歐米漫遊二回、支那視察五回、南洋方面視察等、その足跡は殆んど全地に及んであつた。

學殖豊富にして見聞廣く、信ずる處篤くして偏することなく、加ふるに博覽強記の天稟を以てし植民政策學者としては、實に好個の資格と條件とを具備せられて居た。今や大東亞共榮圈の國是は定まり、四方經營の國策遂行、焦眉の急を告ぐるに際し、博士年來の抱負遂に聞くことを得ざるに至りしことは、何たる遺憾事なるか。

同志社との關係。

博士が母校に對していかに忠實なる校友であつたかは左の表を見ても明かである。

追憶文

大正 七年七月 理事 (校友選出)

同 十年四月 同 (同)

昭和 九年四月 評議員 (同)

同 十三年四月 同 (同)

この外に同志社校友會には曾て第十一代の會長の位地を占め、現に顧問の任に在られ、常に僣々誇々の議論を述べて同志と後進の指導に當たられて居たのである。何と云つても博士の特色は、所信に忠實で、立論苟もせず、高く自ら標置せらるゝことであつた。